

指導計画作成の指導の教育効果に関する一考察 —保育実習指導より—

A Study on the Educational Effectiveness of Guidance for Childcare Practice Instruction

福鹿 慶子
FUKUSHIKA Keiko

キーワード：保育実習指導，保育指導計画，保育内容，カリキュラム論，乳児保育，保育者養成

Key Words：Childcare Practice Instruction，Childcare Guidance Plan，Contents of Childcare Curriculum Theory，Infant Care，Nursery Teacher Training

1. はじめに

保育士養成校では、「保育実習（以下、実習とする）」を保育士養成のための重要な位置づけとしている。奈良佐保短期大学（以下、本学とする）地域こども学科においても『実習ハンドブック』を作成し、「保育実習指導 I」や「保育実習指導 II」の授業において実習の意義や実習心得などの事前学習をしている。『実習ハンドブック』には以下のように記載されている。

1. 実習の意義¹⁾

(1) 実践現場を体験する

実地実習を体験し、既に学んだ知識や技術を基礎に実践を経験する機会となる。

(2) 自分自身のよき成長のきっかけをつかむ

失敗を糧とし、自分自身の未熟さを素直に受け止め、再び理論学習に取り組むことにより、保育者・教育者として、よりよき成長のきっかけをつかむことができる。

(3) 理論を裏付ける

実践現場でのいろいろな具体的場面や出来事などと講義で学んだ理論とが、体験を伴って結びつくことによって、理論の理解が一層深まっていく。実習はこのための貴重な機会である。

この意義を踏まえ、筆者は、学外実習を学内で学んだ理論や技術を実践の場で統合する「実践学習の場」と捉えた。

そのため、実習前の「保育実習指導 I」，「保育実習指導 II」の授業においては、学生がこれまでに学んだ知識や技能をいかし、実習を行うための指導計画の立案と計画に基づいた模擬保育の指導を行っている。

保育者には一つ一つの子どもの言動を自分なりに受け止め、考察し、対応しながら保育を進めていくことが求められる。また、「保育所保育指針」^{注1)}においても、保育者による受動的保育ではなく、子どもが主体的に遊びに取り組み、自ら経験し学びを深めていけるように、環境を通しての保育が必要とされている。しかし、1 回生の学生にとっては、今まで実際に乳幼児に接する機会に乏しく、講義で学習した子どもの発達に関する基礎理論を指導計画に反映させ保育内容を考え、指導計画を作成することは難しいことである。

そのため本研究においては「指導計画の立案」および「模擬保育を通しての学び」に焦点を当て、よりよい学びを修得するための実習指導のあり方の工夫について考える。

2. 実践

2-1 指導計画作成について

(1) 指導計画の大切さ

指導計画作成にあたり、本学カリキュラムでは「カリキュラム論」、「乳児保育Ⅰ」、「乳児保育Ⅱ」、「こどもと環境Ⅰ」、「こどもと言葉Ⅰ」などの保育内容5領域（指導法）においても、指導計画作成の指導を行っている。これは、子どもが五感を使い環境を通して主体的に活動を行っていくことが保育の現場では大切にされているからである。

様々な活動についての指導計画作成することは、子どもの姿から保育の展開を構想し、自分がどのような保育をしたいのか何度も考えることになる。また、保育のねらいや活動の流れを具体的に言語化することで、意図をもって子どもと共に活動できるようになる。そして、どのようなねらい・活動で保育するのかをわかりやすく伝え、共有し保育できるのも指導計画作成の大事な役割の一つである。

筆者は指導計画作成の指導をするにあたり、記載内容を各年齢の発達を確認しながら一つずつ丁寧に学生に伝えることが理解につながると考えた。まず指導するにあたり、指導計画の書き方について「保育実習指導Ⅰ」、「保育実習指導Ⅱ」で学生に推奨している「実習の記録と指導計画」²⁾より、項目ごと本に沿って細かく指導した。

(2) 実態

講義内容理解・修得が不十分な学生にとって、指導計画作成することは容易ではない。そこで、その実態を知るために本学地域こども学科2022年度1回生45名が受講する後期授業「保育実習指導Ⅰ」にて、2022年9月にGoogle Formsを使い、実習に関する不安や難しいと感じることについてのアンケート調査を行った。

調査対象者には、授業内で記述内容を公開する場合があること、公開する場合は匿名を遵守する旨を説明した。

その結果、78.4%の学生が実習で不安を感じるのは指導計画作成（指導案）だと答えている（図1）。また、指導計画作成で難しいと感じることとしては、「保育者（実習生）の援助」（43.2%）、「子どもの予想される活動」（29.7%）を挙げている。

このように、子どもの各年齢の発達が理解できておらず、どのような遊びができるのか、各年齢で経験させたいことは何なのかなど、子どもの姿が予想できていないがために、保育者が子どもにどのように関われば良いのか援助が難しいと感じていることが分かった（図2・3）。

筆者の授業でも、全体的な計画や教育課程の仕組みを理解していない学生や、達成目標が高すぎたり、発達以上のねらいを立てたりする学生が多くみられる。さらに、具体的な子どもの姿がイメージできないがゆえに保育者（実習生）の援助が具体化できず立案に時間を要してしまう学生も多い。

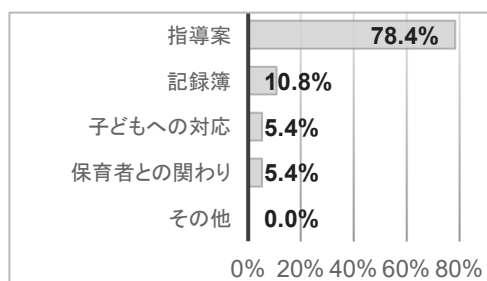


図1 実習で不安なことは何ですか

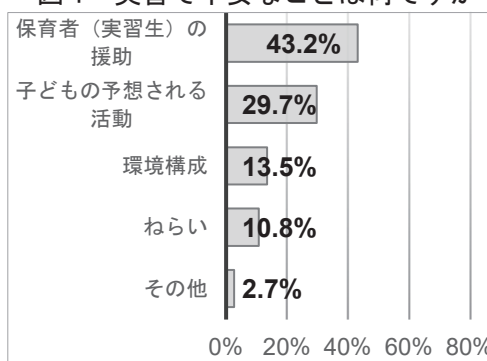


図2 指導計画作成で難しいと感じることは何ですか

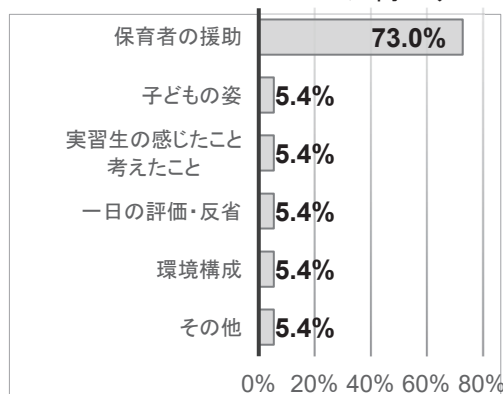


図3 記録簿で難しいと感じることは何ですか

(3) 素案作り

このような現状を踏まえ、初めから指導計画作成に取り組むのは難しいと考えた。そこでまずは、素案作りから試みることにし、表 1 のように年齢・時間・場所・主活動・活動を選んだ理由・保育者の願い・活動の大まかな流れ・指導計画への肉付けなど、子どもたちと一緒に何がしたいと考えているのかを紙に書くことから始めた。それでも「何から始めればよいのか全く分からない」「どのような活動をすればよいのか分からない」と記入できない学生や、頭の中で考えていることはあるがそれを文章にして記すことができない学生も多くいることが分かった。

年齢や月齢を把握し個々の発達を理解した上で子どもへの適切な援助を行うことは、指導計画作成の際の前提である。これを理解していない学生のために月齢や年齢ごとの発達とその姿を「乳児保育」や「保育実習指導 I」、「保育実習指導 II」などのテキストで一つ一つ確認することにした。

表 1 素案

学籍番号	氏名	
諸条件	年齢： 時間： 場所：	
主活動		
活動を選んだ理由 保育者の願い		
	活動の大まかな流れ	指導計画へ肉付けする際のポイント
導入		
中心となる活動		
まとめ		

(4) 確認作業

子どもの活動内容を考える上で重要なことは、「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」などで記されている「育みたい資質・能力」があり、要領や指針の「ねらい」や「内容」につながっていることである。この「ねらい及び内容」に示されているのが 5 領域である。この 5 領域を意識し活動内容を考えていく必要がある。どの領域のねらいを立てればよいのか、子どもの遊びをどうとらえればよいのか学生がイメージをもちやすくするために、図 4 を用いて説明した。学生には、一つの遊びで領域ごとにねらいがあること、今日の前にいる子どもたちにどのような視点で関わる必要があるかを確認させることで、子どもの活動内容を考えやすくするよう指導の工夫をした。

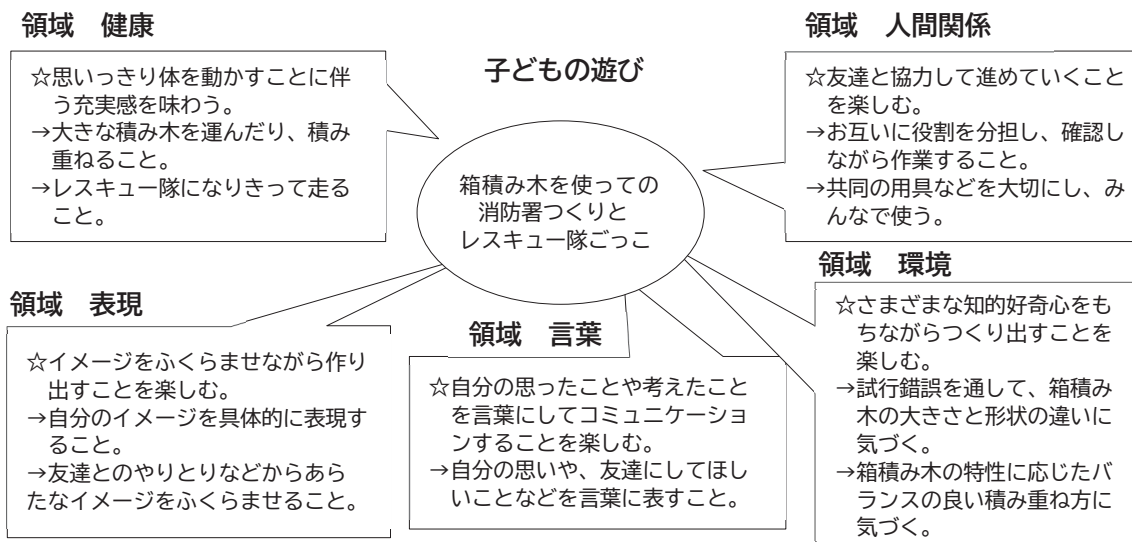


図 4 子どもの遊びをとらえる視点としての「領域」イメージ図³⁾

(5) 指導計画作成の流れ

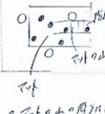
一つ一つ確認した素案をもとに指導計画作成をした。図5の学生Aは、「子どもたちがマットに興味をもてるように声をかける」「子どもたちの安全に配慮しながら見守る」と記入しているが、援助内容が書けていない。そこで、0歳児の発達について確認させた。0歳児の援助は声をかけるだけでなく保育者との関係がとても大切であり、「先生と一緒に楽しい」と思えるような援助をすることを赤色で修正し、口頭で丁寧に説明し再提出させた。その結果、図6のように、「子どもたちがマットに興味をもてるように保育者が実際にマットに上で楽しさを見せる」と修正している。

図7の学生Bは、子どもの予想される姿を理解し書くことができていない。Bの学生は、「保育者の手遊びを見る」「保育者のところに集まる」など大活動と小活動を分けず、箇条書きに記載しており、また、「手遊びを見るのを楽しむ姿がある」など、子どもの心情を記載していた。そこで、この場合は「手遊びをする」が大活動であるのに対し、「保育者の手遊びを見る」「保育者のところに集まる」など流れを具体的に書き表したものが小活動である。子どもの予想される活動には、大活動と小活動があり、この姿で活動の流れが分かるように記載する必要があること、また「手遊びを見るのを楽しむ姿がある」など、心情を書くべきではなく、子どもの行動を書く必要があることを、赤色で修正し、口頭でも伝え丁寧に指導した。

その結果、図8のように、大活動と小活動を分けて記載することで、活動の流れを分かりやすく記載することや、子どもの心情ではなく「手遊びを見る」など子どもの行動を記載することができるようになっていく。

このように、指導計画を個別に添削し、再提出させるという指導を繰り返し行った。また、必要に応じて教員と相談しながら個別にやりとりを行い指導計画作成ができるように指導した。15回の授業の中で、何度もやり直ししながら「書くことに慣れる」ことが重要であることが分かった。

部分一日実習指導計画

実習園名	学務番号	実習生氏名
月 日	実習時間	検印
配属クラス	組	〇歳児 男児〔 〕名 女児〔 〕名
主活動	マットの上で遊ぶ。	
前日までの振り返り	ねらい ・マットの感触と遊ぶ。 ・山登りや足踏みなどの動きを体験する。	
時間	環境の構成	予想される幼児の活動
10:00	 <p>マット 保育者 子ども</p>	<p>保育者の援助と留意点</p> <p>・子どもがマットに興味をもてるように声をかける。 ・子どもがマットの上で遊ぶ姿を見守る。 ・山登りや足踏みなどの動きを体験する。 ・保育者の手遊びを見る姿がある。 ・保育者のところに集まる姿がある。</p>

再提出

図5 学生A 1回目指導計画^{注2)}

11. 保育計画案


実習園名	学務番号	実習生氏名
月 日	実習時間	検印
配属クラス	組	〇歳児 男児〔 〕名 女児〔 〕名
子どもの姿	身体が動くようになってくる。	
主活動	マットの上で遊ぶ。	
ねらい	マットの感触や色に興味をもてる。	
時間	環境の構成	予想される子どもの活動
10:00	 <p>保育者 子ども</p>	<p>保育者の援助と留意点</p> <p>・子どもがマットに興味をもてるように声をかける。 ・保育者が実際にマットの上で遊ぶ姿を見せる。 ・子どもがマットの上で遊ぶ姿を見守る。 ・山登りや足踏みなどの動きを体験する。 ・保育者の手遊びを見る姿がある。 ・保育者のところに集まる姿がある。</p>

図6 学生A 2回目以降の指導計画^{注2)}

部分・一日実習指導計画	
実習園名	学
12月 日	実習時間 10:00 ~ 10:30
配属クラス(うさぎ)組	(0)歳児 男児(3)名 女児(3)名
主活動 マット 運重 マツで遊ぶ(マツで(マツの形)を作る) 前日までの幼児の姿(生活や遊びの様子)ともかわりなどを具体的に記述する ・身近な人や物に興味を示し、自分から近づいて行こうとする、不思議よく遊ぶ	
時間	観察の構成 予想される幼児の活動 保育者の援助と留意点
10:00	保育士の遊びを見学するため、保育者の周りに集まる マット マットの下の所にいる
10:10	マットで山をつくる マット
10:30	マットの舟に乗る

図7 学生B 1回目指導計画注2)

12月 日(月) 実習時間 10:00 ~ 10:30		検印
配属クラス(うさぎ)組	(0)歳児 男児()名 女児()名	()歳児 男児()名 女児()名
子どもの姿 ・身近な人や物に興味を示し、自分から近づいて行こうとする、不思議よく遊ぶ		
主活動 マットで遊ぶ		
時間	観察の構成 予想される子どもの活動 保育者の援助と留意点	
10:00	保育者 子ども 保育者の遊びを見て、保育者の所に集まる 保育者のまわりに手をたたく 保育者の歌っているのに反応し、声と拍子に合わせて歌う	保育者が気持ちよく始めるよう、手遊びをする 子どもたちが楽しめるよう、目と合わせて、笑顔で遊ぶように誘う 手をたたく動作をしていいる子どもに声をかけ、拍子に合わせて歌うように誘う
10:10	はいはいでも無理なく登れる角度にする いろいろな角度の山を構築し、発音に合わせて設定する マットの下の所に保育者を置き、山を登るよう、声をかけます 子どもがマットから落ちないように、きつと座れているか十分に確認する 楽しかったね、など子どもの気持ちに共感する この遊びをたいたいと見せるよう声を掛けをする	マットや山登りに興味を示さない子どもは、マットで遊ぶように誘い、保育者が実演し促す 「ごきげん、まもる」自信がつかない子どもは、声かけをしながら誘う 子どもがマットから落ちないように、きつと座れているかを確認する この遊びをたいたいと見せるよう声を掛けをする
10:25	マットの舟に乗る 保育者が引く マットの舟に乗る	マットの舟に乗るよう声を掛けをする

図8 学生B 2回目以降の指導計画注2)

2-2 模擬保育

(1) 令和3(2021)年度までの模擬保育の方法

【授業形態】(90分 1コマ)(学生:40~50名 教員2名)

- ・グループワーク形式:6~7人グループ 7グループ
- ・1つのグループ(保育者役1人、子ども役5人)が保育者役を担当し、模擬保育を行う。
- ・模擬保育時間 20分 1人あたり(各グループ討議、「模擬保育自己・他者評価チェックシート」記入時間も含む)
- ・教員は各グループを回り、適宜解説する。
- ・教員は全グループを回れない場合がある。また、グループの模擬保育を最初から最後まででみることはできない。
- ・授業の最後 教員による総括とまとめ 10~15分
 教員が各グループワーク内で出た学生の意見をまとめ、総括する。

昨年度までは、6~7人のグループに分かれ、一人一人指導計画を立てた内容に沿ってグループ内で保育者役、子ども役に分かれて模擬保育をしていた。しかし、教員数が2名と少なく、グループ内指導をすることはできず、学生同士だけのグループもあった。教員のいるグループでは、教員が保育者役の学生に振り返りと意見を求め、子ども役の学生にも気づきを発表させた上で、模擬保育についての解説を行ったため、グループ内での意見交換が活発になり、次の模擬保育の改善に生かすこともできた。しかし、学生同士のグループでは、真剣に行う学生とそうでない学生の差が大きく、

表2 「模擬保育自己・他者評価チェックシート」

模擬保育自己・他者評価チェックシート														
実施日：2021年 月 日 ()				学籍番号：				氏名：						
評価方法：5段階集団準拠観点別評価														
非言語性観点										言語性観点				
NO	氏名	活動名	年齢	雰囲気	表情	関わり方	視線	声量	スピード	事前準備	ねらい達成度	展開	内容	備考
例	奈良佐保	ボールで遊ぶ	0	5 優しい	3 緊張していたのか表情が硬かった	5 子ども目線で丁寧だった	3 下向き加減だったが子どもと視線を合わそうとしていた	4 良く聞こえた	5 0歳児にあったスピードだった	2 材料がそろえていなかった	5 妥当であった	3 展開まではいなかったがよかった	4 良かった	0歳児を対象としたボール遊びとして雰囲気も良く子どもたちも楽しめると思った

※評価の仕方（評価数値記入後、評価観点工夫点を文章で記入する事） 5：とてもよい 4：まあまあよい 3：ふつう 2：ややわるい 1：わるい

何を話し合い、どのような意見を交換すれば良いのかわからず時間を無駄にしてしまうことも多くあり、学生だけでは必要な力がつかないことが課題となっていた。

保育者役の学生の模擬保育を子ども役の学生が見ながら役をすると、「保育できていた」や「楽しかった」「私も同じことをしようと思った」など抽象的なコメントのみであり、話し合いをすることは難しかった。また、真剣に模擬保育を行っている学生にとっては、自分の振り返りに対して、他の学生がどう感じ、考えるのか意見を聞きたいが、改善につながる意見を得ることができないことも多くあった。

そこで、学生も同じように意見を交換し活発な話し合いが行われるようにするためにはどうすればよいか、すべての学生が同じ経験をするにはどうすればよいかと実習担当教員間で考えた。その結果、模擬保育を見る視点を学生全員が共有できるように、表2「模擬保育自己・他者評価チェックシート」(以下、「評価チェックシート」)を作成した。

表2「評価チェックシート」を用いることで、学生は、どの観点で模擬保育を見るのが理解でき、意見交換がしやすくなった。一人一人にチェックシートを返却し、自分はどこができていて、できていなかったかを分析することもできるようになった。しかし、グループ内では共有できたが「全員の模擬保育が見れないから何をしていたのかわからない」「他学生がどんな保育をしていたのか知りたい」「他学生の案を参考にしたい」という学生の声もあった。

(2) 新しい試み：令和4（2022）年度以降の模擬保育

上述意見をもとに、令和4年度は全ての学生が、他のグループの模擬保育を見ることができるようにと「にじの部屋（模擬保育室）」で行っている模擬保育をビデオカメラで撮影し、隣にある「622講義室」においてGoogle Meetを用いて同時配信する試みを始めた。

【授業形態】(90分 1コマ)(学生:40~50名 教員2名)

- ・模擬保育時間 10分
保育者役の振り返り, 視聴している学生の意見交換 10分
教員より総評 5分
- ・1グループ 6~7人(保育者役1人, 子ども役5~6人) 毎時間 3~4グループが模擬保育を行う。
- ・保育者役を担当する学生は, 模擬保育を実施する1週間前までに「模擬保育指導計画」を教員に提出し, 指導を受ける。「模擬保育」実施日の3日前までには, 最終「模擬保育指導計画」を教員に提出し, 「模擬保育指導計画」は受講者全員に配信される。配信された「模擬保育指導計画」を見ながら, 学生は子ども役を担当する, あるいは「模擬保育」を視聴する。
- ・「にじの部屋(模擬保育室)」にて模擬保育を行い, それをビデオカメラで撮影したものを Google Meet を用いて「622 講義室」にいる他のグループの学生に同時配信する。
- ・教員は, 「にじの部屋」と「622 講義室」に各1名配置する。
- ・ビデオカメラは基本的に固定撮影とするが, 「にじの部屋」にいる教員は「622 講義室」の学生が視聴しやすいように, カメラアングルを動かすこともある。
- ・「622 講義室」にいる教員は, 配信される「模擬保育」を見ながら, 注意すべき視点について必要に応じて解説する。
- ・昨年度まで紙媒体であった「評価チェックシート」の内容を Google Forms を使って「振り返りシート」として記入できるようにし, 子ども役と視聴学生は「振り返りシート」を一つのグループが模擬保育終えるごとに記入する。
- ・教員は, 子ども役と視聴学生が記入した「振り返りシート」の集計を授業後に保育者役の学生に配信する。

模擬保育を実施した学生の中には, 指導計画通りに保育をすることが難しかった学生や指導計画が十分に書けていないために保育にならなかった学生もいた。模擬保育後の振り返りでも, 「緊張して思うようにできなかった」「指導計画通りに行かなかった」「言葉がけが難しい」「思っていた通りに子どもは動かないので対応に困った」など, 実際に保育者として保育することで気づくことが多くあったようである。

また, ビデオ撮影による同時視聴が可能になったことで, すべての学生が同じ模擬保育を見て, 振り返りをするのが可能になったこと, また, 教員がすべての模擬保育を見ることができるようになり, 必要があれば, その場で学生に注意すべき視点などの解説ができるようになった。このことにより, 保育者役学生の振り返り, 子ども役, 視聴学生のコメントなど様々な視点, 多くの意見をもとに一つの模擬保育について良かった点を確認し合い, 改善点を考えることができるようになり, 保育で注意すべき視点にも気づくことができようになった。

さらに, 昨年度までは, 各グループ内で記載していた紙媒体の「評価チェックシート」(表2)を今年度は Google Forms を使った「振り返りシート」に変更し, 子ども役と視聴学生には一つのグループが模擬保育終えるごとに記入させた。保育者役の学生には, 授業後にスプレッドシートで集計したものを一人一人に返却した。そうすることで, 学生が自分だけでは見つけられなかった課題点を見つけることができ, 良い刺激になった。

「振り返りシート」の一部抜粋を表3に挙げた。この「振り返りシート」からは, 「活動前の導入の絵本の内容が発達年齢に合っていて良かった」「一人一人と関わっていたが, 早口で0歳児にはききとりにくいと感じた」など, 子ども年齢や月齢を把握し個々の発達を理解した上で子どもへの適切な保育を行うことが必要であることを学生が理解している様子が伺える。

表3 模擬保育「振り返りシート」より抜粋^{注3)}

雰囲気	<ul style="list-style-type: none"> ・元気で明るい雰囲気よかった ・計画通り進めないといけなさと焦っている感じがした
表情	<ul style="list-style-type: none"> ・常に笑顔よかった ・声色で明るい雰囲気は伝わるが、マスク越しなので表情がわかりにくかった
関わり方	<ul style="list-style-type: none"> ・優しく声をかけていたが、0歳児にはわからない言葉が多かった ・一人一人と関わっていたが、早口で0歳児にはききとりにくいと感じた
目線	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの目線に合わせてよかった ・子どもたちが座っているとき、立つのではなく一緒に座っていたので良かった
声量	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き取りやすかった ・声も大きく、ハキハキとしていて聞き取りやすかった
スピード	<ul style="list-style-type: none"> ・早口でわかりにくかった ・すぐに活動に移るのではなく、実際に見本を見せながら進めたほうが良かった
事前準備	<ul style="list-style-type: none"> ・人数分用意できていた ・床にマットを敷くとよかった ・ボールや音のなるピン、サイズや色合いは良かった ・活動前の導入の絵本の内容が発達年齢に合わせて良かった
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・0歳児のねらいにしては難しかった ・素材にふれた遊びを取り入れたほうが良かった ・ねらいと少しずれていたと思う
展開	<ul style="list-style-type: none"> ・ボールの絵本を読んだ後にボール遊びの活動していたので良かった ・新聞紙に慣れてから活動に進んだほうが良かった ・ペースが速かったので残念だった
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・0歳児には難しい ・感触や音を楽しむだけなら良かったが、ボーリングになるとピンをねらったり、順番を待ったりしないといけなくなるので、年齢がもう少し大きくなってからのほうが良いと思った
全体を通しての感想	<ul style="list-style-type: none"> ・全体を通して良かったと思うが、0歳児の活動としては、難しかったと思う ・年齢がもう少し上の段階であることが望ましいと思った ・保育者がとても明るく接していたので、雰囲気がよく楽しそうだったが、発達年齢に合わせていたとは言い難い ・他の学生の様々な保育を見て、<u>実際乳児側になり模擬保育に入ることで、保育者一人一人違った学びがあった</u> ・<u>大きい声で優しく関わる姿や、模擬保育中の雰囲気、流れを止めない保育にするためにどうしたら良いか、準備物が年齢に適切しているかなど、感じるものがたくさんあった</u> ・<u>難しいとってしまうが、まず保育者として楽しむことを忘れず、この模擬保育での学びが自分の保育の実践に活かせるように模擬保育の授業を大切にしたい</u>

また、「他の学生の様々な保育を見て、実際乳児側になり模擬保育に入ることで、保育者一人一人違った学びがあった」「大きい声で優しく関わる姿や、模擬保育中の雰囲気、流れを止めない保育にするためにどうしたら良いか、準備物が年齢に適切しているかなど、感じるものがたくさんあった」「難しいとってしまうが、まず保育者として楽しむことを忘れず、この模擬保育での学びが自分の保育の実践に活かせるように模擬保育の授業を大切にしたい」など、他学生の模擬保育を見て一人一人が様々な視点から学ぶことができた様子が伺えた。

3. 考察

2-1 学生の「実習で不安なことは何か」のアンケート結果から、実習で不安なことは「指導計画作成」であり、「指導計画作成で難しいと感じること」は「保育者の援助」「子どもの予想される活動」を挙げていることから、学生が年齢や月齢を把握し、個々の発達を理解した上で子どもへの適切な援助を行うことができるよう指導した。

まず、「素案作り」から「子どもの活動内容」を考え、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」の「ねらい及び内容」に則った自分が実践したい保育について、一人一人丁寧に確認作業をしながら、「指導計画作成」を繰り返し指導した。その後、学生が考えた「指導計画」を使って学生自身に、保育者役、子ども役を担当させた「模擬保育」を授業で行った。その際、学生には「振り返りシート」を記入させ、受講者全員で模擬授業の振り返りをさせた。模擬授業後には、子ども役、模擬授業を視聴した学生に、Google Forms を使って「振り返りシート」を記入させ、保育者役の学生にその「振り返りシート」を返却した。

2-1 のとおり、指導計画を個別に添削し、再提出を重ねることで、大活動、小活動を分けて記載し、「子どもの活動」の流れが分かるように記載できるようになっているため、今後とも継続して、「書くことに慣れる」ことの重要性を教員・学生も実感しながら、学びや指導を継続して実践していきたいと考える。

学生が記載した「指導計画」を使った「模擬授業」について、2-2 のとおり、今年度は、「にじの部屋（模擬保育室）」で行っている模擬保育をビデオカメラで撮影し、隣にある「622 講義室」において Google Meet を用いて同時配信する試みを始めた。このことで、すべての学生が同じ模擬保育を見て、振り返りをすることが可能になり、保育者役、子ども役、視聴学生のコメントなど様々な視点、多くの意見をもとに模擬保育を振り返ることができるようになった。また紙媒体の「評価チェックシート」を Google Forms を使った「振り返りシート」に変更することで、保育者役を担当した学生は、他学生からの様々な視点や多くの意見を得ることで、自らの保育を省察することができるようになり、これらの授業方法の取り組みには、教育的な効果があったと考えられる。学生の「振り返りシート」にも「他の学生の様々な保育を見て、実際乳児側になり模擬保育に入ることで、保育者一人一人違った学びがあった」（表 3）との記述がみられる。

一方で、学生の中には発達を理解し、子どもたちの動きを想像することの重要性は分かっているが、指導計画が書けない、模擬保育ができない学生もいる。書くことができない理由には、子どもの予想される活動をイメージすることができない、考えたことを文章にすることができないという 2 つが挙げられる。指導計画の立案について丁寧に教えてきたが、イメージしたことを文章にすることができるよう今後、重点的に指導していく必要があると考えられる。

保育者役の模擬保育後の学生からは、「指導計画をきちんと書いていないと、予想外のことが起き、困った」など、指導計画を書くことの大切さ、指導計画が十分に書けていないため保育ができないことへの気づきの発言があった。この学生自身の振り返りと気づきをもとに、次の模擬保育に生かすこと、指導計画作成に何が足りないのか、どうすれば良いのかを考え、今後のより良い指導計画を立案につなげていきたいと考える。この指導案作成の添削を地道に繰り返しつつ、学生の理解が深まるよう「模擬保育」時の授業での「振り返り」を継続していきたい。

4. まとめ

本稿では、「保育実習指導 I」「保育実習指導 II」授業における、「指導計画の立案」および「模擬保育を通しての学び」に焦点をあてて考察してきた。

指導計画立案のために、「素案」から「子どもの活動内容」を考え、細かくねらいの在り方や立て方など段階を経て指導することは、学生が苦手としていた子どもの発達にあった保育を考えることという点では、効果的であった。また、ICT を活用しながら行う実習指導のあり方は、全ての模擬保育を教員が指導することができ、また、学生は自身が立て

た指導計画に基づいて行った模擬保育についての意見を多くの学生から得られることで、指導計画に書かれている内容と実際の保育が結びつき、指導計画やその重要性の理解につながった。しかし、指導計画の立案方法を理解できていてもそれを言葉にし、考えたことを文章に書くことができないことの課題が浮き彫りとなった。指導計画立案のためには、「考えたことを文章にして書く」「子どもの発達を理解する」ことが重要である。今後、学生に求められる力もこの2つである。そのためには、今後、細かく丁寧に個々に合わせた指導を学科教員と協力、連携しながら進めていきたいと考える。

注釈

注1) 「保育所保育指針」には、「1 保育所保育に関する基本原則」「(4) 保育の環境」に「ア 子ども自らが環境に関わり、自発的に活動し、様々な経験を積んでいくことができるように配慮すること」⁴⁾とある。

注2) 図5～図8の指導計画については、公開する場合は匿名を遵守する旨を説明し掲載している。

注3) 表3の模擬保育「振り返りシート」については、公開する場合は匿名を遵守する旨を説明し掲載している。

引用文献

- 1) 奈良佐保短期大学 地域こども学科：『2022年度入学生用 実習ハンドブック：学外実習（保育所・施設・幼稚園・小学校）の基本』，pp.14-15（2022）
- 2) 山本淳子編著：『記入に役立つ保育がわかる実習の記録と指導計画：0～5歳児年齢 別実習完全サポート：部分実習指導計画と連動した遊びつき』，ひかりのくに，p.14（2018）
- 3) 佐伯一弥，金瑛珠，鈴木彬子，高橋優子著：『Workで学ぶ保育原理』，わかば社，p.50（2019）
- 4) 厚生労働省編：『保育所保育指針解説：平成30年3月』，フレーベル館，pp.24-26（2018）

参考文献

- 1) 奈良佐保短期大学 地域こども学科：『2022年度入学生用 実習ハンドブック【幼稚園】』（2022）
- 2) 奈良佐保短期大学 地域こども学科：『2022年度入学生用 実習ハンドブック【保育所】』（2022）
- 3) 岩崎淳子，及川留美，粕谷亘正著：『教育課程・保育の計画と評価：書いて学べる指導計画 第2版』，萌文書林（2019）
- 4) 朝井拓久也著：『パターンと練習問題でだれでも書けるようになる！保育実習日誌・指導計画：幼稚園の教育実習でも活用できる！』，明治図書（2020）
- 5) 田中卓也，松村齋，小島千恵子，岡野聡子，中澤幸子編著：『保育者になる人のための実習ガイドブック A to Z：実践できる！保育所・施設・幼稚園・認定こども園実習テキスト』，萌文書林（2020）
- 6) 橋本弘道，片川智子編著；秋田有希湖，天野珠路，芹澤美奈子，田坂裕子，増田直広著：『あなたがつくるみんなでつくる保育所実習』，萌文書林（2022）
- 7) 近喰晴子，寅屋壽有廣・松田純子編著：『保育実習（基本保育シリーズ 20）』，中央法規出版（2016）
- 8) 安家周一著：『0～5歳児子どもの姿からつむぐ指導計画 第4版』（2017）
- 9) 矢藤誠慈郎，高嶋景子，久保健太編著：『保育・教育実習（アクティベート保育学 12）』，ミネルヴァ書房（2022）
- 10) 厚生労働省編：『保育所保育指針解説：平成30年3月』，フレーベル館（2018）
- 11) 文部科学省編：『幼稚園教育要領解説：平成30年3月』，フレーベル館（2018）